慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	学生の運動実施キャリアパターンと運動・スポーツ活動に対する意識
Sub Title	The sports carrier pattern and the status of sports and athletics of university students
Author	植田, 史生(Ueda, Fumio) 近藤, 明彦(Kondo, Akihiko) 佐々木, 玲子(Sasaki, Reiko) 山内, 賢(Yamauchi, Ken) 村山, 光義(Murayama, Mitsuyoshi) 小森, 康加(Komori, Yasuka) 上向, 貫志(Uemukai, Kanshi) 田中, 伸明(Tanaka, Nobuaki)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	2000
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.39, No.1 (2000. 1) ,p.29- 37
JaLC DOI	
Abstract	The goal of our written survey, w hose target group included 3500 Keio University Students, w as to analyze the difference in the desire to participate in sports and athletics, between groups of students who are currently involved in sports and those who are not, and depending on their carrier patterns of participation to the sports activities. The result of our research is described below. Those students who currently participate in sports tend to have a great deal of confidence and pride in their activities, and furthermore, f eel that participating in athletics in general is an activity of tremendous value. Furthermore, from the view point of student's carrier patterns of participation in sports, t he students who continued to play sports tented to be affirmative to enjoy the sports it self and to communicate with others. And also they beard any negative feeling towards sports rather than the students who denied playing sports. The main reasons the students decided to resume or quit to play sports stems from whether or not they desire to execute activities positively and recognize the necessity and positive benefits of sports in the lives of most individuals.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00390001-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生の運動実施キャリアパターンと運動・スポーツ活動に対する意識

植田　史生*　　近藤　明彦**　　佐々木玲子*
山内　　賢***　　村山　光義***　　小森　康加****
上向　貫志*****　　田中　伸明*****

The Sports Carrier Pattern and the Status of Sports and Athletics of University Students

Fumio Ueda[1]　Akihiko Kondo[2]　Reiko Sasaki[1]
Ken Yamauchi[3]　Mitsuyoshi Murayama[3]　Yasuka Komori[4]
Kanshi Uemukai[5]　Nobuaki Tanaka[5]

Summary

The goal of our written survey, whose target group included 3500 Keio University Students, was to analyze the difference in the desire to participate in sports and athletics, between groups of students who are currently involved in sports and those who are not, and depending on their carrier patterns of participation to the sports activities. The result of our research is described below.

Those students who currently participate in sports tend to have a great deal of confidence and pride in their activities, and furthermore, feel that participating in athletics in general is an activity of tremendous value. Furthermore, from the view point of student's carrier patterns of participation in sports, the students who continued to play sports tented to be affirmative to enjoy the sports it self and to communicate with others. And also they beard any negative feeling towards sports rather than the students who denied playing sports. The main reasons the students decided to resume or quit to play sports stems from whether or not they desire to execute activities positively and recognize the necessity and positive benefits of sports in the lives of most individuals.

Key words : athletic and sport activities, university students, survey of opinion and "awareness／consciousness", sports one participates in for one's entire life
キーワード：運動・スポーツ活動，学生，意識調査，障害スポーツ

緒　　言

1990年代に入り多くの大学では保健体育科目が必修から選択へ，すなわち縮小化の傾向へと移行している。しかし，運動・スポーツ活動自体の重要性は衆目の一致するところである。成長期にある大学生にとってもそれは例外ではなく，運動・スポーツ活動が心身の健康に有効であることは多く指摘されるところであり，学生達にとって運動・スポーツ活動の

*　慶應義塾大学体育研究所助教授　[1]Associate professor of the Institute of Physical Education, Keio University.
**　慶應義塾大学体育研究所教授　[2]Professor of the Institute of Physical Education, Keio University.
***　慶應義塾大学体育研究所専任講師　[3]Assistant professor of the Institute of Physical Education, Keio University.
****　慶應義塾大学体育研究所助手　[4]Assistant of the Institute of Physical Education, Keio University.
*****慶應義塾大学体育研究所非常勤講師　[5]Lecturer of the Institute of Physical Education, Keio University.

実践は，充実したキャンパスライフを送るための重要な一側面であると考えられる。そこで，体育・スポーツ教育にかかわり，学生達の運動・スポーツ活動の推進を図ろうとする立場の教員としては，体育科目および運動・スポーツ活動への学生の意識やニーズについての実態を的確に把握することは必要かつ重要であると思われる。これまで，大学生のスポーツ行動に関しては，実施の実態調査[1)9)16)]，スポーツに関する意識分析[3)12)]，参加を規定する要因[10)14)]などの観点からの研究報告がなされている。筆者らも，本塾において必修科目であった保健体育科目が選択科目へ移行する過程から現在までに，慶應義塾の大学生を対象に「運動・スポーツ活動に関する意識」についてのアンケート調査[16)]を実施し，学生の運動実施の実態[16)]，体育実技履修者の意識[13)]について報告してきた。これまでの報告では，6学部（文学部・経済学部・法学部・商学部・医学部・理工学部）・4学年にわたる学生の運動実施形態や頻度等を把握し，教育カリキュラム上の一システムである体育実技履修という形態による運動実践者を取り上げ，その実施意識を明らかにしてきた。一方，こうした多くの学生の中には，日常的な生活の中でも自発的に運動を実施する者とそうでない者が存在し，両者の運動・スポーツに関する意識には違いがあることが予想される。また，大学におけるスポーツ実施には，入学以前の中学校や高校における比較的管理された運動部活動の経験的側面が影響すると考えられる。筒井ら[15)]も，青少年の時系列的なスポーツ参加状況の分析が重要との立場から，運動実施におけるキャリアパターンを分類し，心理学的側面を分析している。その結果，運動に対する有能感や運動の結果に対する期待などの意識にキャリアパターン別の差異を報告している。そこで本研究では，先の本塾におけるアンケート調査の中から，「運動実施者と非実施者」，「運動実施のキャリアパターン別グループ」に着目し，「運動・スポーツ活動に関する意識」について検討することを目的とした。

方　　法

1. 調査対象は慶應義塾大学，文学部，経済学部，法学部，商学部，医学部，理工学部の6学部[注1]1～4年生とした。各学部，学年とも約7分の1（医学部は約7分の5）の学生を任意に抽出した。その学生3,500名（全学生の約15%）を対象として，質問紙を作成し，郵送にて配布，および回収を行った。
2. 調査内容は，1）個人のプロフィール，2）中学・高校時の運動経験，3）大学入学後の運動実施状況，4）運動・スポーツへの意識，5）体育実技履修内容の5つのカテゴリーからなる調査用紙を作成した。（質問項目は文献[16)]付表を参照されたい）。
3. 調査用紙は，1997年7月に配布，同年8月31日までに回収した。回答は，1051名（回収率約30%）から得られた。
4. 分析方法：

Ⅰ 個人プロフィールから，現在の運動・スポーツ活動の「実施」・「非実施」の2群，①中学校から現在に至るまでの運動実施状況を元に，運動実施のキャリアパターンを「運動継続」「再開」「中断」「非実施」の4群に分類した。なお，中学校，高校，大学とも，6ヶ月以上の継続をもって実施とした。

Ⅱ 調査用紙のカテゴリー4)「運動・スポーツへの意識」に関する質問について主成分分析を行い，質問項目を「学生のスポーツ・運動に関する意識」の要素として分類した。「運動・スポーツへの意識」は，「運動・スポーツ活動に対する意識」，「運動・スポーツ活動を行った結果に対する期待」，「運動・スポーツ活動を行う自分自身に対する意識」の三部門，計79の質問項目から成り，回答は質問に対して「非常にそうである」「そうである」「そうではない」「全くそうではない」の4件法によった。

分析は，Ⅰの個人プロフィールから分類した①，②の各群と，Ⅱの主成分分析により分類した質問項目群を比較検討した。

結果及び考察

主成分分析の結果から，質問項目群は13に分類され，それぞれ「活動性・自信」「競技志向」「娯楽」「比較価値」「効果」「有効・協力」「意志」「健康状態」「生活管理」「劣等性」「環境」「否定・嫌悪」「必要性」とした。（それぞれの質問項目は，表1に示すとおりである。）

表1　13に分類された質問項目

質問項目群	質問項目
活動性・自信	活動的な方だ 運動は得意である 何をやってもすぐうまくなる 何事にも機敏に動けるほうである 明朗活発である 体力はある方だ 何事も楽しめるほうだ 挑戦するのが好きだ 私には得意なスポーツがある 汗を流すのが好きだ 運動・スポーツ活動が好きだ 運動をすることはおっくうである　＊ 私には一緒に運動をする仲間がいる 運動をする事に多少の不安がある　＊
競技指向	勝つ事に意義があると思う 相手と競う事が大切である 勝った時の感激が何物にも変えがたい 技能の向上が大切である 負けた時のいやな気持ちが耐え難い 耐えることが大切である 頑張る事が大切である
娯楽	気の向いた時に行うものである　＊ 見て楽しむものである　＊ 楽しむ事が大切である 余暇の有効な利用方法である
比較価値	運動・スポーツ活動をする時間が有るならアルバイトをする　＊ 運動・スポーツ活動をする時間が有るなら他の娯楽（映画・遊戯など）をする　＊ 運動・スポーツ活動をする時間が有るなら休養をする　＊ 運動・スポーツ活動をする時間が有るなら文系サークル活動をする　＊ 他にお金が必要だから運動のためには使えない　＊ 何となく運動をしない　＊ 運動・スポーツ活動をする時間が有るなら勉強をする　＊ 運動は疲れるからいやである　＊ しばらく続けると飽きてしまう　＊
効果	体力を高める事が出来ると思う 健康の増進に役立つと思う 体力の向上に役立つ 我慢強さを育てる事が出来ると思う 継続して行うべきものである 運動は身体のためにやった方がよい ルールを守る精神を育てる事が出来ると思う
有効・協力	チームメイトと仲良くする事が出来ると思う 多くの友人をつくる事が出来ると思う 仲間と楽しくやるのが好きだ チームメイトとの協力が大切である 楽しむ事が出来ると思う
意志	飽きっぽい方だ　＊ 意志の強いほうだ

＊逆転項目

健康状態	病弱な方である　＊ 医者から運動を止められている　＊ 健康には自信が有る
生活管理	忙しくても趣味の時間は取ってある 毎日忙しいが休養睡眠は十分にとる方である
劣等性	私は神経質な方だ 自分に劣等感を持っている 友達がやっている事が羨ましく思う
環境	運動したいけど教えてくれる人がいない　＊ 仲間と気軽に運動できる施設がない　＊ スポーツ教室やイベントがあれば参加する 大学に運動施設があればやりたいと思う
否定・嫌悪	他の日常生活に大切なものを犠牲にすると思う　＊ 身体に悪いと思う　＊ 他のやりたい事が出来なくなると思う　＊ お金の無駄使いだと思う　＊ 運動によって負けたり失敗していやな思いをする　＊ いやな思いをすると思う　＊
必要性	自分にとって運動は必要でない　＊ 私は健康だから運動は必要ない　＊ 何の役にも立たないと思う　＊ 人は運動スポーツ活動を行う必要があると思う

＊逆転項目

現在自発的に運動を実施している者とそうでない者をグループ化（実施群と非実施群）し，分散分析を行った。分散分析の結果，「否定嫌悪」，「生活管理」を除いた11項目群において，現在の運動実施・非実施群に質問項目群の主効果が認められた（$p<0.001$）。表2は，13の各質問項目群について，実施，非実施両群の平均得点と標準偏差値，および分散分析の結果（F-値と有意水準）を，F-値の高い項目順に示したものである。「劣等性」を除くすべての項目群において，運動実施群が非実施群に対し高い平均得点を示した。また，F-値は「比較価値」，「活動性・自信」，「競技志向」の項目群においてが特に大きかった。

表2　運動実施・非実施群の各質問項目群別平均得点および標準偏差

質問項目群	実施群 (n=563)	非実施群 (n=488)	F-値
比較価値	3.31±0.50	2.72±0.52	340.78 ＊＊＊
活動性・自信	3.15±0.49	2.65±0.57	225.42 ＊＊＊
競技志向	2.97±0.54	2.62±0.54	108.68 ＊＊＊
環境	2.80±0.51	2.52±0.43	88.82 ＊＊＊
友好・協力	3.54±0.49	3.26±0.56	73.41 ＊＊＊
必要性	3.73±0.33	3.54±0.47	63.18 ＊＊＊
効果	3.35±0.47	3.15±0.45	48.09 ＊＊＊
娯楽	2.98±0.35	2.86±0.32	32.73 ＊＊＊
健康状態	3.45±0.50	3.27±0.54	29.84 ＊＊＊
意志	2.77±0.66	2.55±0.67	25.40 ＊＊＊
劣等性	2.54±0.66	2.62±0.62	3.86 ＊
否定・嫌悪	3.11±0.51	3.06±0.49	2.94 NS
生活管理	2.74±0.69	2.74±0.69	0.003 NS

＊;$p<0.05$　＊＊;$p<0.01$　＊＊＊;$p<0.001$

運動実施者と非実施者におけるスポーツ意識の比較をしたものとしては，Bandura[2]の Social Cognitive Theory に基づく自己効力感（Self-efficacy Model）という視点にたった先行研究がある。自己の行動をどのくらいうまく出来るかということへの予測である効力予期，スポーツ・運動を実施した結果の予測である結果予期，運動に対する有能感，などの意識が運動実施者に有意に高く示されることが報告されている[4)7)11)]。また，スポーツを実施する際の目的意識や[5)]，達成目標の違い[6)]がスポーツ実施を規定する要因に挙げられ，ライフスタイルとの関係も分析されてきている[8)]。こうした実施者の志向性は「目標の種類」[11)]とも言い換えられ，スポーツにおける動機づけ研究として重視されている。表2に示すように，13項目中11項目に実施，非実施群において差がみられたが，特に，効果の高かった「比較価値」，「活動性・自信」，「競技志向」といった質問項目群の内容は，先行研究における「自己効力感」，「目標の種類」に関するものと考えられ，それが本研究でも上位にあらわれたと考えられる。いずれにしても，運動実施者の運動・スポーツに関する意識が，非実施者に比較して多くの点で有意に高いということが確認された。

表3は，運動実施のキャリアパターン別の人数比率を示している。中学校・高校・大学と運動を継続実施している者（運動継続群）は34.2%，中学校から現在まで継続的な運動経験がない者（非実施群）は10.9%であった。一度やめたが，現在は運動を再開している再開群と，運動を継続していたが，現在は中断しているという中断群はそれぞれ，19.4%，35.5%であった。なお，運動を実施していた者のうち，中学校における運動実施期間は 30.3（±6.6）ヶ月，1週間の実施日数は 4.6（±2.0）日，高校においては 27.9（±8.0）ヶ月，4.5（±1.7）日であり，高校でわずかに短い結果であった。これらの運動実施は，学校のクラブ活動が圧倒的に多かった。

表3　運動実施キャリアパターン別人数構成

運動実施のキャリアパターンによるグループ	人数	%	
運動継続群 （中学・高校・大学と運動を継続している）	359	34.2	現在運動実施
再開群 （一度やめたが，現在運動を再開している）	204	19.4	
中断群 （運動を継続していたが，現在中断している）	373	35.5	現在運動非実施
非実施群 （中学・高校・大学と継続的な運動経験がない）	115	10.9	

これら4つのキャリアパターン別に各質問項目群毎の平均得点及び標準偏差値，分散分析の結果（F-値と有意水準）を示したものが表4である（F-値の高い順）。分散分析の結果，「健康状態」と「劣等性」を除いた11項目群において，運動実施のキャリアパターン別に質問項目群の主効果がみられた（$p<0.001$）。さらに質問項目群ごとにシッフェの検定により平均値の多重比較を行った。図1～3は，質問項目群ごとにキャリアパターン間の差を示したものである。図1は，「友好・協力」「活動性・自信」「比較価値」の3項目群をまとめた。これらの質問項目群においては，「比較価値」の，継続実施-再開間を除き，他の全キャリアパターン間で1%水準以上の差がみられた。この結果はすなわち，友人との交流や協力，自己への自信，運動への価値観に関する意識は，運動の継続性，現在の実施といったファクターに大きく関与していることを意味している。

表4　運動実施のキャリアパターングループの各質問項目群平均得点および標準偏差

質問項目群	継続実施 (n=359)	再開 (n=204)	中断 (n=373)	非実施 (n=115)	F-値
友好・協力	3.41±0.45	3.12±0.53	2.81±0.51	2.50±0.54	128.95 ***
活動性・自信	3.26±0.44	2.94±0.53	2.76±0.53	2.35±0.58	106.36 ***
競技志向	3.06±0.52	2.81±0.56	2.67±0.52	2.49±0.58	42.79 ***
否定・嫌悪	3.63±0.43	3.38±0.56	3.32±0.51	3.14±0.68	33.54 ***
比較価値	2.84±0.49	2.73±0.52	2.57±0.42	2.39±0.43	32.58 ***
娯楽	3.34±0.78	2.98±0.88	2.89±0.84	2.59±0.92	26.34 ***
環境	3.77±0.31	3.68±0.36	3.56±0.45	3.44±0.52	25.66 ***
必要性	3.38±0.46	3.29±0.47	3.17±0.45	3.12±0.49	16.23 ***
意志	3.50±0.47	3.37±0.52	3.27±0.54	3.25±0.58	13.71 ***
生活管理	2.85±0.65	2.61±0.66	2.54±0.69	2.64±0.65	13.65 ***
効果	2.99±0.37	2.95±0.33	2.88±0.32	2.82±0.34	9.31 ***
健康状態	3.12±0.52	3.10±0.50	3.08±0.47	2.96±0.52	2.26 NS
劣等性	2.76±0.69	2.75±0.72	2.72±0.70	2.78±0.61	0.39 NS

*;p<0.05　**;p<0.01　***;p<0.001

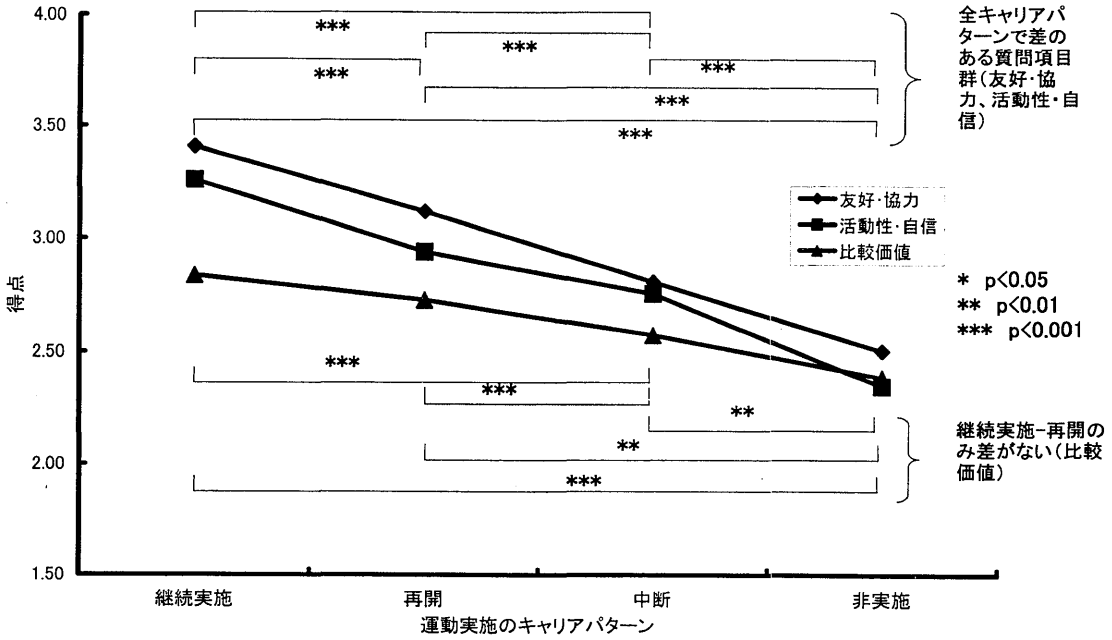

図1　運動実施のキャリアパターン別の比較(1)・「友好・協力」「活動性・自信」「比較価値」

図2は，「競技志向」，「否定・嫌悪」「娯楽」「環境」の4項目群について示したものであるが，「否定・嫌悪」「娯楽」では再開-中断間のみ差がなく，「競技志向」，「環境」では中断-非実施のみ差がない結果であった。いずれにしても，「継続実施」に対して他のキャリアパターンが有意に低い得点を示し，図1の3つの質問項目群同様にほとんどのキャリアパターン間で差がみられた。図1，2から，自己効力感に関連する「活動性自信」「比較価値」や目標の種類である「競技志向」の他，「友好・協力」「娯楽」といったスポーツの楽しさや人との関り合いに関する項目もキャリアパターンに影響を及ぼすという結果が得られた。筒井ほ[14]かは，結果予期を，スポーツが良い結果をもたらすか，否かの2つに分類し，運動実

施のキャリアパターンとの関係を報告している。それによれば，運動不参加者は，肯定的結果予期で有意に低得点を示し，逆に否定的結果予期で有意に高い得点を示した。つまり，運動参加者には運動が自己に良い結果をもたらすことが意識され，不参加者には運動による悪い結果が意識されていると考えられる。本研究の結果から考えると，運動の継続や再開には自己効力感やスポーツの志向性に加え，友人関係の開発や強化，娯楽性の獲得が運動実施の結果として期待されることが重要であろう。先行研究において，児童期や青年期のスポーツ活動における“不快経験”が運動実施を阻害し，非活動的なライフスタイルが形成される可能性も指摘されている[18]。本研究における「否定嫌悪」の項目でもキャリアパターン間に差があることはそれを支持するものであり，これは運動の非実施・中断を招く一つの要因と考えられる。

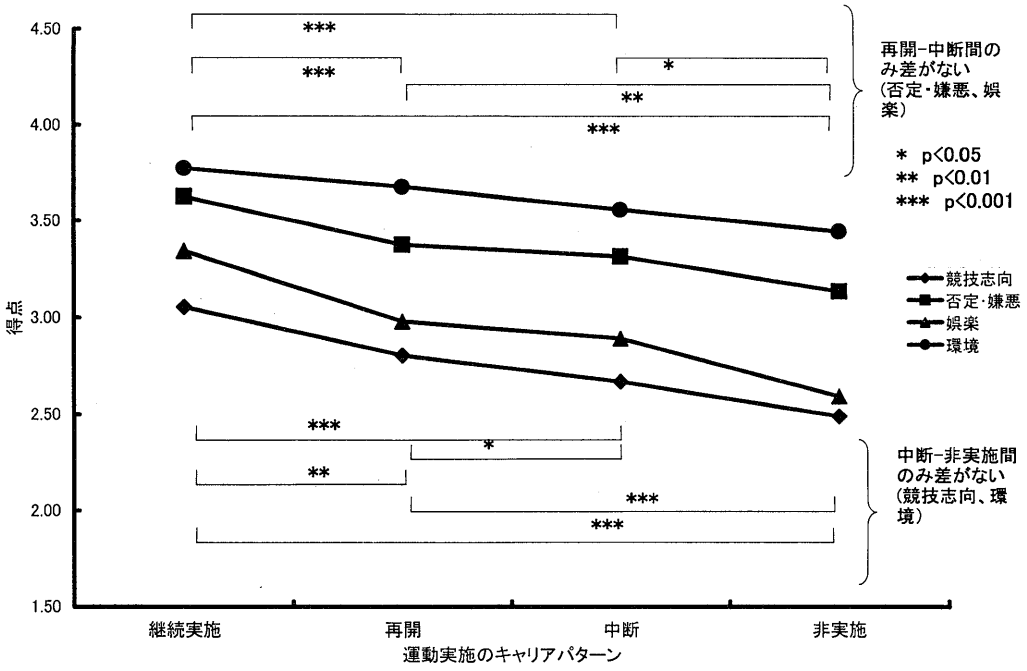

図2　運動実施のキャリアパターン別の比較（2）・「競技志向」「否定嫌悪」「娯楽」「環境」

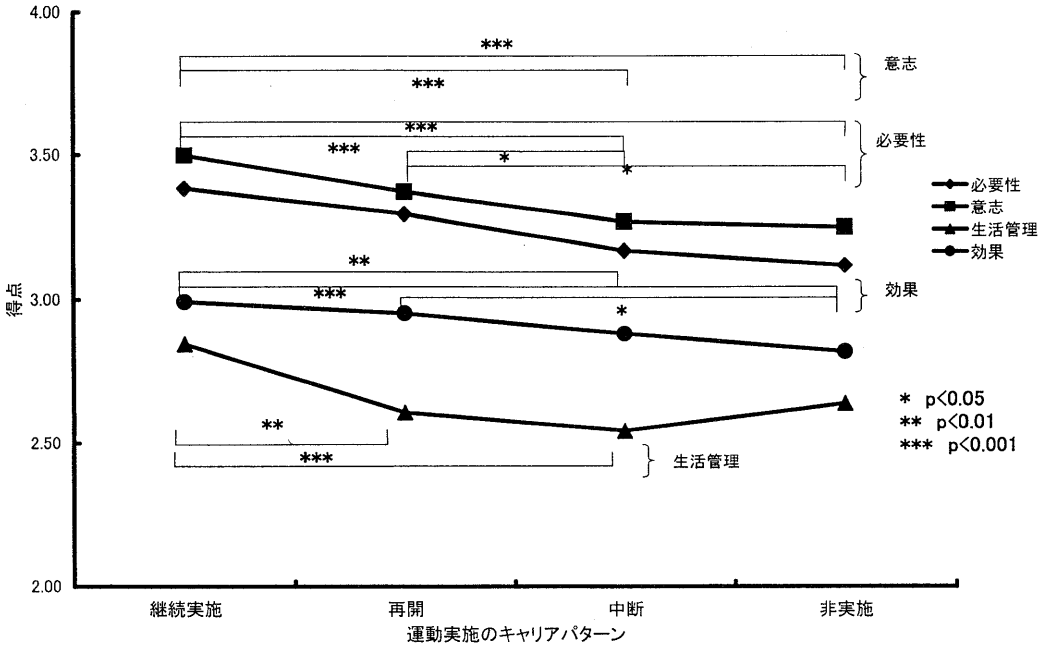

図3　運動実施のキャリアパターン別の比較（3）・「必要性」「意志」「生活管理」「効果」

図3は，残り6つの質問項目群のうち，分散分析で主効果が得られた4項目群について示している。「意志」「必要性」「効果」に共通する知見として，継続実施に対して，中断，非実施が有意に低い得点を示している点が挙げられる。さらに，「必要性」については，再開と中断・非実施，「効果」においては，再開と非実施間でも有意差がみられる。これらは，継続実施と再開という現在実施している者と，それ以外の実施していない者との違いと捉えられよう。この点について，将来の運動•スポーツ活動実施意志別のグループ間における，運動・スポーツ活動の意識[17]に関する結果とを一部比較する。この調査は筆者らによる本調査と同一の調査表を用いた同様の分析である。現在運動を実施していないが将来再開したいと思う者と，将来も実施する意志のない者の意識の差は，同様の13の質問項目群中，「必要性」と「効果」であり，本研究におけるキャリアパターンにおける再開と中断・非実施の違いに一致している。以上のように，強い意志や，運動の必要性や効果の認識が，継続実施または再開するという行動に結びついていることが考えられ，将来の運動実施意志にも反映されていると考えられる。一方，「生活管理」では，継続実施と再開・中断に差がみられた。本調査から「生活管理」という項目にまとめられた質問は「忙しくても趣味の時間は取ってある」「毎日忙しいが休養睡眠は十分にとるほうである」という内容であり，ある意味では，ライフスタイルとして，自己の生活時間を強くコントロールする姿勢に通ずるものかもしれない。継続実施と非継続の間に差がないのに，再開・中断が継続実施に対して低いことは，運動を中断してしまう一要因にこうした生活中の時間管理姿勢の弱さが関連しているのかもしれない。

ま と め

慶應義塾大学の学生3,500名を対象とした質問紙表による調査から，現在の運動実施・非実施および運動実施のキャリアパターン別のグループ間における，運動・スポーツ活動に関連する意識の違いを分析した。その結果，以下のことが明らかになった。

現在の運動・スポーツ活動実施の有無からみると，スポーツを行っている者は，他との比較において運動・スポーツに価値を置き，運動・スポーツの実施に対しての自信が強い。また，競技志向が高く，総じてスポーツ・運動に対して積極的な意識を持っているということが明らかになった。

さらに，運動実施のキャリアパターン別に，運動継続，再開，中断，非実施の順で比較をすると，価値観，自信，競技志向に加え，友好・協力，娯楽といったスポーツの楽しさや人とのふれあいに関する点に肯定的で，嫌悪感がない傾向が強いことが示された。また，強い意志を持ち，運動・スポーツの効果や必要性を認識する点が，運動の再開や中断を決定する一要因となるであろうことが示唆された。

注1　体育実技カリキュラムの異なる環境情報学部・総合政策学部の2学部は本研究の調査対象からは除外した。

付記1　本研究の一部は平成10年度慶應義塾学事振興資金の補助に拠った。

付記2　本研究は慶應義塾大学体育研究所研究プロジェクト「21世紀のスポーツ•健康教育」の人文・社会学的アプローチとして行われたものである。

文　献

1) 荒井貞光（1990）大学生のスポーツ参加の<場>の実証的研究――転換期を迎えた大学の保健体育科目との関わりの中で――．広島大学総合科学部紀要 8:1 -14.

2) Bandura, A. (1977) Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review 84: 191-215.

3) 後藤肇，高野聰，市場俊之，柳井宗一郎，水口潔（1997）体育授業における大学生のスポーツに対する意識に関する研究（第一報）——学習心理的側面・社会心理的側面に着眼して——. 体育研究 31:1-11.

4) 細田朋美，杉原隆（1999）体育の授業における特性としての目標志向性と有能さの認知が動機づけに及ぼす影響 : 体育学研究 44: 90-99.

5) 石井源信，岩本良裕，古屋正俊（1984）体育・スポーツに対する態度および志向性を規定する要因分析. 東京工業大学人文論叢 9:115-117.

6) 伊藤豊彦（1996）スポーツにおける目標志向性に関する予備的検討. 体育学研究 41:261-272.

7) 加賀秀夫，石井源信，杉原隆，杉山哲司，筒井清次郎，深見和男（1994）心理学的側面からの青少年のスポーツ参加に関する研究. 平成5年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告:39-59.

8) 北村尚浩，冨山浩三，川西正志，湯川孝裕，山内照代，久保和之（1996）スポーツ参加者の類型化に関する研究——スポーツに対する志向から——. 鹿屋体育大学学術研究紀要 15:33-40.

9) 村山光義，田中伸明，石手靖（1997）新カリキュラムにおける体育実技履修学生の運動活動に関する調査. 慶應義塾大学体育研究所紀要 36(1): 59-66.

10) 丹羽勅昭，長沢邦子，浅井修（1981）女子大生の体育実技への態度を規定する要因の検討. 体育学研究 25(4):251-260.

11) 杉原隆（1995）心理学的側面からの青少年のスポーツ参加に関する研究，第4章スポーツに参加しない子供たち. 平成6年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告:88-94.

12) 竹之内隆志，山本裕二，中島豊雄（1995）大学生の健康と運動に対する認知——選択制体育実技の参加者を中心として——. 総合保健体育科学 18(1):109-117.

13) 田中伸明，上向貫志，村山光義，山内賢，佐々木玲子，植田史生，近藤明彦（1999）慶應義塾大学学生の体育実技の履修に関する実態調査. 慶應義塾大学体育研究所紀要 38(1):45-56.

14) 徳永幹雄，金崎良三，多田納秀雄，橋本公雄，菊幸一（1989）スポーツ行動の継続化とその要因関する研究(2)——大学生の場合——. 健康科学11:87-98.

15) 筒井清次郎，杉原隆，加賀秀夫，石井源信，深見和男，杉山哲司（1996）スポーツキャリアパターンを規定する心理学的要因 : Self-efficacy Modelを中心に. 体育学研究 40:359-370.

16) 植田史生，佐々木玲子，村山光義，田中伸明，上向貫志（1998）慶應義塾大学塾生の運動実施に関する実態調査——体育実技非履修者を含む全学年の調査から——. 慶應義塾大学体育研究所紀要 37(1):55-69.

17) 植田史生，近藤明彦，佐々木玲子，山内賢，村山光義，小森康加，上向貫志，田中伸明 学生の将来のスポーツ実施の意志と運動・スポーツ活動に関する意識. 東京体育学研究1999年度報告（印刷中）

18) 山口泰雄（1996）運動・スポーツの阻害因子と対策. 臨床スポーツ医学 13(11):1221-1226.